

「あり方・生き方」を考える対話の場を 学校につくるためにできること

東京大学大学院 総合文化研究科 教授 かじたに 梶谷真司

ここまで見てきたように、生徒に自己の「あり方・生き方」を考えさせたり、その中で求められる他者理解や相互承認を促したりする上で、大切な活動が「対話」だ。そこで、「対話」の場の1つとして注目されている「哲学対話」の実践者である東京大学大学院の梶谷真司教授に、その概要と実践のポイントについて話を聞いた。

1 答えが1つではないテーマについて 自由に語り合う「哲学対話」

編集部 梶谷教授は、中学校や高校、

企業などで、「哲学対話」を実践されていますが、まず、「哲学対話」とはどのような活動なのかを教えてください。

梶谷 哲学対話は、5〜20人程度の参加者が輪になって座り、1つのテーマについて自由に話をし、一緒に考えていく活動です。テーマは、参加者が日頃から感じている疑問、その時に話したいと思っていることなど、何でも構いません。「なぜ、戦争はなくなるのか」「なぜ、学校は必要なのか」など、答えが1

つとは限らないテーマ、問いで対話します。

哲学対話において最も大切なのは、自由に話をし、一緒に考えることです。そのためのルールとして、私はいつも次の8つを提示しています。それは、①何を言ってもよい ②人の発言を否定しない ③ただ聞くだけでもよい ④お互いに問いかける ⑤知識ではなく、経験に則して話す ⑥話を無理にまとめない ⑦意見が変わってもよい ⑧分からなくなってもよい、です。都立高校を始め、複数の高校で、放課後など



かじたに・しんじ 京都大学大学院人間・環境学研究所博士課程修了。専門は、哲学（現象学）・比較文化・医療史・哲学プラクティス。東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属の「共生のための国際哲学研究センター」のセンター長も務める。著書に『シュミッツ現象学の根本問題～身体と感情からの思索』（京都大学学術出版会）、『考えるとはということか 0歳から100歳までの哲学入門』（幻冬舎新書）など。

を利用した哲学対話を実践しています。哲学対話で、答えが1つではない問いに向き合い、自ら考え、自分なりの答えを出す力が生徒に育まれた結果、進学実績を大きく伸ばした

高校もあります。それは、教科学力の高い生徒が集まったいわゆる進学校でのことではなく、高校入試の受験偏差値の低い学校でのことです。

2 「あり方・生き方」は教わるものではなく、対話の中で自ら考え、深めていくもの

編集部 哲学対話は、生徒が自分のあり方や生き方を考え、深める点で有効な場なのでしょうか。

梶谷 生徒に限らず、大人であっても、自分のあり方や生き方を考え、それらを深めるのは、様々な経験の中で得た気づきや疑問、不安などを他者と共有する中においてではないでしょうか。だからこそ高校生には、成功者の話を聞かせること以上に、対話する時間が大切だと、私は考えています。得意教科が自分のやりたことだと思込んでしまっている学生は、東京大学でも少なくありません。様々なテーマで自由に語り合う中で、学生や生徒には自分が真に興味を持っていること、大切にしたいことに気づいてほしいです。ただし、哲学対話の場を設けたからと

いって、「とにかく話しなさい」と、生徒に対話を強制するのはマイナスです。「今は話したくない」そのテーマでは話したくない」といった生徒

もいるかもしれませんし、強制されると自分の本音を語らずに取り繕ってしまう可能性もあります。話したいと思った生徒が自由に参加できる場を、校内に定期的につくっていくのが一番よいと思います。

今、「総合的な探究の時間」だけでなく、すべての教科・科目の授業で探究的な学習活動が求められています。探究型の学習では、考えたいテーマや問いを生徒が自分で設定し、他者との対話を通して考えを深めていきます。その点においても、哲学対話はいくつかの学校に広まっています。

3 すべての生徒・教師に、問いを立て、対話を楽しむ力がある

編集部 哲学対話は、どのような学校、生徒でも、すぐに実践できるものなのでしょうか。

梶谷 教科学力などの程度にかかわらず、すべての生徒が哲学対話を実践する力を持っています。しかし、最初は、どんなテーマで話し合いたいかを問うても、生徒からはすぐに意見は出てこないかもしれませんし、テーマを掲げても、発言が少ないかもしれません。それは生徒に對話する力がないからではなく、これまで教師やほかの生徒の前で自分の考えを語る機会が少なかったため、生徒が対話に慣れていないだけなのです。じっくりと生徒の言葉を待つうちに、生徒たちは自分の思いや考えを語り始めます。「生徒がこれだけのことを考えていたなんて！」と、驚く教師も少なくありません。

授業の中に対話を取り入れることもできます。例えば、教科書を読んだ、書かれたことに対する問いを生徒に考えさせ、さらにグループで「よい問いとそう思う理由」を語り合い、その結果を発表させるのです。時には、教師にも答えが分からない問いが飛び出すこともあるかもしれません。そんな時は、その場で教師が答えられなくても構いません。生徒と一緒に答えを考えればよいのです。むしろ、そうした教師の態度から、生徒は多くを学ぶことができます。

哲学対話の流れの一例 (50分の場合) *

・5~20人程度の生徒、教師が輪になって座る。

① 哲学対話の説明 (5分程度)

以下の点について、教師が説明する

- ・哲学対話を実施するねらいや意図 (教師としての思い)
- ・みんなで考えたいテーマ (問い) について自由に語り合う場であること
- ・結論を出したり、意見をまとめたりする場ではないこと

② 問い決め (5分程度)

- ・あらかじめ生徒に話し合いたいテーマ (問い) を複数考えてきてもらい、多数決で1つの問いに絞る

③ 対話のルールの説明 (5分)

④ 対話 (30分) ※

⑤ 振り返り (5分)

※布製の人形やクッションなど、柔らかくて持ちやすく、手元にあると安心できるようなものを1つ用意する。それを持った人が話をして、話し終わったら話を聞きたい人に渡す。今は話したくないという時は、ほかの人にそれを渡し、話したい人が手を挙げた場合は、その人に渡す。対話の促進を目的としたこのようなツールは、「コミュニティーボール」と呼ばれる。

* 梶谷真司『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』(幻冬舎新書)を基に編集部で作成。